九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

動詞述語文における「が」「は」の出現条件 : 動詞の意味特徴との関係を中心にして

弘瀬, 葉子
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4493129

出版情報：比較社会文化研究. 28, pp.53-62, 2010-09-30. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第28号（2010）53～62
Social and Cultural Studies
No.28（2010），pp. 53～62

動詞述語文における「が」「は」の出現条件

―動詞の意味特徴との関係を中心にして―*

弘瀬葉子（ヒロセヨウコ）

1．はじめに

日本語の「が」と「は」に関してはこれまで膨大な研究が行われてきたが、いまだに統一した見解がないのが現状である。一方、最近では、「が」と「は」の機能的差異を、主にそれらが出現する述部との関係から考察するといったミクロ的な研究も出てきているが、浅山（2004）も指摘するように、そのような研究の多くは名詞述語文や形容詞述語文を対象としたものが多く、日本語文の大部分を占める動詞述語文における「が」と「は」の機能的差異に関しては、まだ研究の余地が多く残されている。

そこで、本研究は、「が」「は」研究に関する以上のような現状およびその問題点を踏まえながら、「が」と「は」の間にある機能的差異を、それが出現する動詞述語文のあり方、特に、その動詞の意味特徴という観点から、考察していくことを目指す。

2．先行研究

「が」と「は」に関する先行研究は前述のように膨大なためすべて取り上げることは困難である。この章では、とりわけ本研究が課題とする動詞述語と「が」「は」の出現の関係性に注目したものを取り上げ検討していく。

2.1 「現象文」と「判断文」：三尾（1948），野田（1984,1996）

これまで「が」「は」の出現状況は、「現象文」と「判断文」という叙述の類型と何らかの関係があると指摘されてきた[1]。

そこで、まず、この「現象文」と「判断文」と「が」「は」の関係について言及した先行研究を取り上げる。「現象文」と「判断文」の区別と「が」「は」の関係について言及した代表的研究としては、三尾（1948）、野田（1996）をあげることができる。

まず、三尾（1948）は、(1)(2)のような例文をあげながら、「現象文」の主語には「が」がつき、「判断文」の主語には「は」がつくと述べている。

(1)　雨が降っている。
(2)　それは梅だ。　　（三尾1948：72）

三尾によれば、(1)は現象をありのまま、判断の加工をほどこさず、心に映ったままをそのまま表現した「現象文」であり、「が」が使われる。それに対して、(2)では、課題である「それ」に対して、話し手の主観が判断をくだして、「梅」が解決として真であると主張する「判断文」であり、「は」が使われる、という。

次に、野田（1984）は「現象文」「判断文」という分類に加え、特に、動詞文について次のような指摘をしている。ⅰ）は述語に関するもの、ⅱ）は主語に関するものである。

ⅰ）習慣的な動作、真理（「水は百度で沸騰する」など）、所有、精神活動（「思う」「考える」など）、意志、可能、義務などを表す動詞述語のときはふつう有題[2]になる。また、意志的な動作を表す動詞を述語とする文は有題になりやすい。反対に、非意志的な動作を表す動詞を述語とする文は無題になりやすい。

　人は　物を　動詞（他動詞の能動態）
　　物が　動詞（自動詞、他動詞の受動態）

ⅱ）その動作主が何をするかが予想しやすく、その動作主がその動作をすることに意外性が少ないときは有題文になる。反対に、その動作主が何をするかが予想しにくく、その動作主がその動作をすることに意外性があるときは無題文になる。また、複数の動作主がそれぞれの意志で別々にその動作を行う場合は、ふつう無題文が使われる。さらに、主格名詞句の表すものが読み手の関心になく、それがその場に現れることが予想しにくいときは無題文が使われる。反対に、主格名詞句の表すものが読み手の関心を集めていて、それがその場に現れることが予想しやすいときは有題文が使われる。

（野田1984：66-72）

また、野田(1996)は「現象文」・「判断文」と「無題文」・「有題文」との関係についても言及し、「現象文」と「無題文」、あるいは、「判断文」と「有題文」はそれぞれ同じことを示しているように見えるが、実は根本的に異なることである、と説明している。詳細は次のとおりである。

現象文は主題をもっているかどうかではなく、話し手の判断が加わっているかどうかということが中心になっている。そのため、主題を持っていないと考えられる文でも、話し手の判断が入っているということで、現象文ではなく判断文に分類されることがある。一方、無題文というのは、有題文と対立させた文の分類である。これは、文が主題を持つかどうかという点から分類したものである。 (野田1996：84-85)

2.2.2 「動詞文」と「名詞文」：三上(1953, 1963)

次に「が」「は」の出現と動詞述語文と名詞述語文の関係について触れたものを見る。

三上(1953)は、「動詞文」と「名詞文」(形容詞や名詞で結ぶもの)の規定について取り上げ、「動詞文」は事象の経過(process)を表し、「名詞文」は事物の性質(quality)を表しており、形容詞や名詞で結ぶものとして説明している。その上で、三上(1953：42)は「動詞文は係助詞「ハ」がなくても完全でありえるのに対し、名詞文は「ハ」に助けられるのを原則とする」と指摘し、さらに、三上(1963：48)は「名詞文は原則的に有題であるが、動詞文は有題無題半々ぐらいだ」と述べている。

2.2.3 「属性叙述文」と「事象叙述文」：益岡(1987,2000,2004), 砂川(2008)

益岡(1987)は「現実世界を対象として表現者がおこなう概念化」を「叙述」と呼び、それを「属性」を述べるものと「事象」を述べるものとに分けている。この二つの概念は(3)(4)によって説明される。

(3) 日本は島国だ。
(4) 雷が落ちた。 (益岡1987：35)

(3)は「属性」を述べるものだが、このように対象の「属性」を示す文は典型的には時間的な制限を受けないという。一方、(4)は「事象」を述べるもので、典型的には時間軸上のどこかで発生する動的な出来事を表す表現になると説明されている。また、益岡(2000：40-43)によれば、「属性叙述は属性の持ち主を表す部分とそれが有する属性を表す部分という二つの部分で構成され、典型的な属性叙述の表現においてはテンスとのかかわりが見られない。それに対し、事象叙述とはある時空間に実現・存在する事象を表現するものである。その事象叙述においては、叙述される事態は時間の流れの中に具現化されるものであり、時間の超越することはない。そのため、常にテンス性を帯びることになる」、という。

一方、砂川(2008)は、益岡(1987)によって提唱された事象叙述文が談話展開の局面でどのような機能を果たしているかを談話分析の観点から記述したものである。特に、アスペクト形式に着目し、事象叙述の有題文と無題文の選択という現象を取り上げている。結果としては、無題文は事象叙述文本来の機能である動的な事象叙述を行っているが、事象叙述文が有題文となると、属性叙述文の「主題－解説」という文構成と同じく「対象Xに対して叙述Yを付与する」という叙述のあり方に変わり、無題文の動的な叙述に比べてより静的な叙述になる、と指摘している[3]。しかし、分析の対象は一つの事例だけであり、ここで得た結論を一般化することができないという問題点がある。

2.2.4 杉浦(2000)

杉浦(2000)は日本語の述部を三つのタイプ(動詞・形容詞・形容動詞)に分け、「は」「が」の機能をそれぞれが出現する文の述語の性質を手がかりに論じている。その概要は次の表のようにまとめられている。

まず、タイプ①の恒常的性質・習慣を表すものは、例えば、「花子は、午前中はいつもいる」のように、主語に「は」がつく場合、「は」の解釈は主題も対照も可能となると述べており、主語に「が」がつく場合は、中立叙述の解釈はなく、例えば、「花子が母に似ている」とい

		「は」主題	「は」対照	「が」中立叙述	「が」総記
タイプ①	恒常的性質・習慣	○	○	×	○
タイプ②	一時的状態・動作	○	○	○	○
タイプ③	存在・知覚可能	×	○	○	○

(杉浦2000：54)

う文におけるように、総記の解釈しかありえない、と言う。次にタイプ②の一時的状態・動作をあらわすものは、「は」がつく場合、主題と対照の両方の解釈が可能であり、「が」がついた場合も、中立叙述と総記の両方の解釈ができる。さらに、タイプ③では、「ケーキはある」という文のように主語に「は」がつく場合は、「ケーキはあるが、クッキーはない」という対照の解釈しかないが、「富士山が見える」のような「が」がついた文では、中立叙述と総記の両方の解釈が可能だと言う。

また、杉浦（2000）は、述部のタイプと「は」「が」の共起のパターンを情報構造の面からも説明しており、「は」は話し手がその名詞句が聞き手の意識にのぼっていると想定していること、「が」は話し手がその名詞句が聞き手の意識にのぼっていないと想定していること、を表すとしている。

2.2.5 「自動詞文」と「他動詞文」：浅山（2004）

浅山（2004）は、自動詞文では、意味的に「認識対象」が主語となり、専ら「が」を使用して中立的になる例が多いのに対し、他動詞文では、「は」も「が」も「動作者」を中立的に提示する例が多くみられるようになる、と述べている。このことを表にまとめると、以下のようになる。

	主語の意味的な役割	中立的に使用できる場合
自動詞文	認識対象	「が」が多い
他動詞文	動作者	「は」も「が」も多い

（この表は執筆者がまとめたもの）

2.3 問題点と本研究の位置づけ

「が」と「は」に関する先行研究は以上のように多種多様であるが、問題となる点がある。それらをまとめると、以下のようになる。

Ⅰ 「現象文」「事象叙述文」は「時間的制約」を受け「が」と結びつくと指摘した論文は多いが、その実態を検証した研究は管見の限り見当たらない。

Ⅱ 三上は「動詞文は有題無題半々ぐらいだ」と述べているが、具体的なデータがなく、その実態は明らかになっていない。

Ⅲ 浅山（2004）は、自動詞文には「が」が、また、他動詞文には「は」も「が」も多いと指摘しているが、これにも具体的なデータが欠けている。

Ⅳ 動詞述語文の「現象文」「事象叙述文」「自動詞文」のそれぞれにおいて、なぜ「が」が出現しやすいのか、また、逆に、「判断文」「属性叙述文」「他動詞文」のそれぞれにおいて、なぜ「は」が出現しやすいのかについて言及しているものがない。言い換えるならば、「現象文」「動的事象文」「自動詞文」と「が」、「判断文」「属性叙述文」「他動詞文」と「は」の結びつきを、一貫性を持って説明している研究が見当たらない。

後に続く章では、このような動詞述語文における「が」「は」を扱った先行研究の問題点を踏まえ、本研究は当該文に出現する「が」「は」の出現状況およびその出現に関与した諸要素を「が」「は」が出現した文の主動詞の意味特徴という観点から明らかにしていきたい。

3．観察

3.1 観察対象

本研究は、「が」と「は」の出現状況を、それらが出現する際の動詞述語との関係という観点から観察するためには、データの網羅的収集が不可欠であると考える。そこで、まず、観察の対象として、小説と新聞という二つの異なるジャンルを選び[4]、以下に示す基準に基づく文を500個ずつ、計1000個の例文を収集し、観察した。

まず、小説においては、地の文で、主語を示す「が」あるいは「は」が出現した主文文末の動詞述語文を収集した。また、新聞においても同じく、主語を示す「が」あるいは「は」が出現した主文で、文末が動詞で終わっている動詞述語文を収集した。ただし、このような方法でデータを収集するにあたって、特に断っておかねばならない点がひとつある。それは、「が」あるいは「は」に前置された語の種類である。本研究では、主語が「私」「僕」などのように話し手を示す一人称の場合はすべて除外せざるをえなかった。なぜならば、本研究の観察を本格的に始める前の調査で、話し手を示す語は、共起した動詞述語文の種類とは関係なく「は」と出現することが極めて多いことが明らかになったからである[5]。

3.2 観察方法

工藤（1995：73-78）の動詞分類に従って、文末動詞の種類と「が」「は」出現の相関関係を観察した。

工藤（1995）は、スルーテイルのアスペクト対立の有無から、日本語の動詞を、（A）外的運動動詞、（B）内的情態動詞、（C）静態動詞という三つに分類している。本研究では、まず、「が」「は」が工藤（1995）のどのような動詞分類と共起しやすいのかを観察したが、後述するように、「が」「は」の出現の実態は必ずしも工藤（1995）の動詞分類ではうまく説明できなかった。そこで、最終的には、各動詞群を「が」あるいは「は」との共起の可能性

という観点から整理し直すことになった。

3.3 観察結果

3.3.1 工藤(1995)の動詞分類と「が」「は」の関係

主文末動詞と「が」「は」の相関関係を観察するにあたっては動詞を所定の基準に従い分類しておく必要があるが、本研究ではその準拠すべき動詞分類として工藤(1995)の分類を利用した。そこで、本研究の収集した全例に出現した文末動詞を工藤(1995)の動詞分類に従い、分類した上で「が」と「は」の関係をまとめと、表1のようになった。

まず、工藤の動詞分類のAタイプの動詞について見てみると、表1によれば、Aタイプの動詞が前項動詞として出現した場合は、全体的には「が」の頻度が「は」の

表1 工藤(1995)の動詞分類と「が」「は」の相関関係[6]

タイプ	動詞の種類	が	は
A1[7]	① 客体の状態変化・位置変化を引き起こす動詞	だす3、あげる2、かける2、そめる2、まとめる2	かける4、あげる4、よせる3、かためる2、つける2
	② 所有関係	—	かう2
	合計	13	17
A2	① 主体変化・主体動作動詞	もつ1、かぶる1、くわえる1[8]	きる4、もつ2、はく2、かかえる1
	② 人の意志的変化動詞	くる43、いく10、ならぶ7、あつまる3、でる3、にゅういんする2	いく6、くる3、あつまる1、にゅういんする1
	③ ものの無意志変化動詞	ひろがる8、でる6、かかる6、つく4、かわる3、たおれる2、あく2、とどく2、うまれる2	たおれる3、ひろがる1、くもる1、きえる1、むける1、つながる1
	合計	106	28
A3	① 主体動作・客体動き動詞	まわす1	うごかす2、ふる2、まわす1、ながす1
	② 主体動作・客体接触動詞	まつ5、うつ1、たたく1、ひっぱる1、あう1	まつ3、さす3、すう2、たたく1、なでる1、すする1、のむ1
	③ 人の認識・言語・表現活動動詞	きく5、のぞく4、みる2、つたえる2、いう2、こたえる1、しゃべる1、よぶ1、さがす1	みる5、こたえる5、はなす5、つたえる2、しゃべる2、ながめる2、きく1、よぶ1、さがす1
	④ 人の意志的動詞	およぐ2、はしる1、いそぐ1	はしる1、いそぐ1、うなずく1、たどる1
	⑤ 人の長期的動作動詞	かよう1、くらす1	すむ3、つとめる3、くらす1、けいえいする1
	⑥ ものの非意志的・動き動詞	なる13、ながれる7、うごく4、ひびく4、ふる4、わらう2、ゆれる1	わらう2、なる1、ゆれる1
	注1 二側面動詞	ふえる8、すすむ3、のぼる1	ふえる5、たれる1、へる1
	注2 遂行動詞	はんたいする1	あやまる1、きんじる1、ひきうける1
	合計	84	68
	合計(A1+A2+A3)	203	113
B	B1 思考動詞	わかる4	かんがえる3、のぞむ2、おもう2
	B2 感情動詞	しんぱいする1	よろこぶ1
	B3 関係動詞	みえる11、きこえる4、おとがする1	かんじる3、みえる1
	B4 感覚動詞	はらがへる1[9]	ふるえる1
	合計(B1+B2+B3+B4)	22	13
C	C1 存在動詞	ある27、いる3、そんざいする(している)1	ある3、いる2、そんざいする(している)1
	C2 空間的配置	そびえている1	—
	C3 関係動詞	ことなる(っている)1、ちがう(っている)1	いみする(している)1、にる(ている)1
	合計(C1+C2+C3)	34	8
その他[10]		続く14、始まる13、増やす5、しめる5、続ける4、起きる4、求める3、起こす3、呼びかける2、述べる2	とどまる5、続く4、よびかける4、語る4、続ける3、求める3、発表する3、説明する2、指摘する、述べる2

ほうより高い（「が」は203例、「は」は113例）。さらに、Aタイプに含まれているA1、A2、A3をそれぞれより詳しく見ると、A2では「が」の出現が「は」を圧倒している。それに対して、A1では「は」のほうが「が」より4個多く出現し、逆に、A3では「が」のほうが「は」より16例多く出現していることが分かる。しかし、A1とA3のいずれにおいても「が」と「は」の間には大きな差は見られなかった。一方、Bタイプの動詞について見ると、全体的にはわずかの差ではあるが、「が」のほうが「は」より多く出現している。しかし、個別に見ると、B3の「感覚動詞」においては、「が」の出現が16例なのに対し、「は」は4例しか見られなかった。同様のことは、B1「思考動詞」、B2「感情動詞」、B4「感覚動詞」においても観察された。最後に、Cタイプの動詞の振る舞いを見ると、少なくとも表1によれば、「が」の出現が「は」に4倍以上の差をつけている（「が」が34例、「は」が8例）。そのうち、特にC1の「存在動詞」の「ある」は圧倒的に「が」と共起していた。

さて、以上の結果から、本研究は動詞述語文における「が」と「は」の出現状況は、事態の時間構造に基づく工藤の分類ではうまく説明できない、と考えるに到った。その理由としては、まずAタイプの動詞において、A2では「が」が圧倒的なのに対し、A1とA3では「が」と「は」が拮抗しているという点があげられる。これは同じ時間構造を持つ動詞群が「が」「は」の出現においては異なる振る舞いを示したものだからである。また同様に、その時間構造がまったく異なるA2の動詞とCタイプの動詞における「が」と「は」の出現状況が互いに類似し、「が」のほうが多く出現している点も看過できない。このような同じタイプの動詞群における「が」「は」の出現状況の相違、また、異なるタイプの動詞群における「が」「は」の出現状況の類似は、「が」「は」の出現状況と文末動詞の意味特徴の関係が工藤（1995）の動詞分類に基づく動詞の時間構造とは異なる性質のものであることを示唆するものである。

3.3.1.1 「が」と共起頻度の高い動詞

本項では前節で見た動詞分類の中で、「が」と共起する頻度の高い動詞の特徴を考察していく。

まず、「が」と共起しやすい典型的な動詞をまとめると、以下の表2のようになる。なお、同表の動詞は「が」が出現した頻度数の高い順に並べてある。

表2によれば、「が」と共起する頻度の極めて高い主文末の動詞は、自動詞が他動詞を圧倒していることが分かる。これは先行研究で見た浅山（2004）の指摘と合致するものである。以下、具体例をあげる。

表2　「が」と共起する頻度の高い動詞

が	来る(42/46)[11]、ある(25/29)、始まる(17/19)、続く（13/16)、なる（13/14)、見える（12/13)、立つ（10/12)、出る（9/9)、入る（8/9)、広がる（7/8)、流れる（7/8)、並ぶ（7/7)、かかる（6/6)、聞こえる（5/5)、起こる（5/5）[12]、いる（3/5）

(5) 韓国では「とりあえず団地を続ける意思は北朝鮮にあるようだ」との見方が出ている。
（毎日2009/06/22）

(6) かえらなければならない時間が来る。　（『東タ』）

(7) 2日深夜から3日未明にかけて、志免、粕屋両町の会社事務所や工場などで3件の不審火があった。
（西日本2009/06/04）

このように、動詞が自動詞の場合の主語の種類を見てみると、「見方」、「時間」、「不審火」のような「モノ」となることが多い。つまり、「主語モノ＋自動詞」という組み合わせのときに「が」が出現しやすいということである。しかし、当該組み合わせになれば必ず「が」が出現するとは限らない。動詞が自動詞にもかかわらず、主語が「人」で、「は」と共起した例もある。次の例を参照されたい。

(8) それにもかかわらず、目の前の友人は、透の目に、あうたびに大きく体格よくなっていくようにみえる。
（『クローズ』）

(8) において「は」が出現する理由は、主語「人」と動詞「見える」の持つ意味との相関関係以外にあると考えられる。つまり、当該文の内容が示すように、主語の「人」はすでに先行文脈に出現したものであり主題として解釈されることから、主題を表す「は」と共起したと見ることができるのである。

3.3.1.2 「は」と共起頻度の高い動詞

次に、「は」と共起する頻度が高い動詞の関係をまとめると、以下のようになった。

表3　「は」と共起する頻度の高い動詞

は	きく（6/8）、かける（4/7)、見る（5/7)、こたえる（5/6)、着る（4/4)、感じる（3/3)、発表する(3/3)、考える(3/3)、住む(3/3)、はく(3/3)

この表によれば、動詞の種類という観点からすると、「は」と共起頻度の高い動詞は大部分が他動詞であり、有生の主語を要求するものであることが分かる。このことから、以上のような動詞が出現する文においては、特に、「人」が主語になりやすいと言える。以下、具体例をあげる。

(9) ばあちゃんは会うたびに、短度も同じことをボクに聞いた。（『東』）

(10) 小さな手の上で、それは何だか子供じみた美しさを放っている、と、透は考える。（『クローズ』）

(9)(10)のように「人」が主語の場合、その指示対象である「人」は先行文脈ですでに出現していることが多く、それが主題を示す「は」との共起に繋がったと考えられる。このように「主語人＋他動詞」の組み合わせでは「は」が出現しやすいが、同環境で「が」が出現することがないわけではない。以下を参照されたい。

(11) 九州経済産業局は３日、九州・沖縄の４月の大型小売店販売動向を発表した。（讀賣2009/06/04）

(11)の主語は「モノ」であるが、それが指示する対象は「人」が動かす組織や機関である。このように「モノ」の主語が「は」と共起するときには、当該の「モノ」が擬人的に用いられていることが多い。

以上、前項動詞と「が」「は」の出現の関係を工藤(1995)の動詞分類を用いて観察してきたが、結果的には、「が」と「は」の出現は事態の時間構造に基づく工藤の分類ではうまく説明できないことが確認された。しかし他方で、3.3.1.1と3.3.1.2で見たように「が」あるいは「は」と共起する頻度の高い動詞の間には何か共通の意味特徴があるように思われる。そこで次節では、この点に関して詳しい考察を加えていく。

4．考察

前節で見たように、工藤(1995)のその時間構造に基づく動詞の分類は、動詞述語文における「が」「は」の出現状況を十分に説明することはできなかった。そこで、本節では、特に、「が」あるいは「は」と共起する頻度の高かった動詞をその時間構造とは異なる新たな観点から分析し直し、それと「が」「は」の関係を考察していく。

まず、本研究で収集した文末動詞の中から出現頻度の高い動詞をあげると、以下の表４になる。

以下では、上の表にあげた動詞を、まず、「が」との共起の可能性という観点から考察していく。最初に、表４における「ある/いる」と「が」の共起について見ていきたい。尾上(2004)によれば、「存在文」は次のような特徴を持つと言う。

表４　出現頻度の高い前項動詞と「が」「は」の出現状況[13]

		合計			合計
来る	が 42/46	46	広がる	が 7/8	8
	は 4/46			は 1/8	
ある/いる[14]	が 30/36	36	死亡する[19]	が 8/8	8
	は 6/36			は 1/8	
始まる[16]	が 17/19	19	流れる	は 1/8	8
	は 2/19			は 7/8	
見える/聞こえる	が 17/18	18	並ぶ	が 7/7	7
	は 1/18			は 0/7	
続く	が 13/16	16	続ける	が 4/7	7
	は 3/16			は 3/7	
行く[17]	が 10/16	16	見る	が 2/7	7
	は 6/16			は 5/7	
なる	が 13/14	14	かける	が 3/7	7
	は 1/14			は 4/7	
増える	が 8/13	13	かかる	が 6/6	6
	は 5/13			は 0/6	
立つ[18]	が 10/12	12	起こる	が 5/5	5
	は 2/12			は 0/5	
出る	が 9/9	9	起きる	が 4/5	5
	は 0/9			は 1/5	
入る	が 8/9	9	聞く[19]	が 1/4	4
	は 1/9			は 3/4	
待つ	が 5/8	8			
	は 3/8				

存在物を先に承認してから存在という述語内容を承認するのではなく、述語（述語そのこと）の承認と主語（存在物）の承認とは原理的に同時的である。

（尾上2004:12-13）

上の尾上(2004)の主張に従うならば、「存在文」は先行研究が指摘してきた現象文の性質を強く持ったものだと言えるだろう。「存在文」において「が」で表示された指示対象は、予め発話の場の話題に上っていたものではなく、話し手がその存在を知覚したと同時に認識されるものだからである。そして、改めて表４で挙げられた動詞を、「存在文」と同じく、話し手による指示対象の知覚という観点から見てみると、「が」の出現頻度の高い動詞の大部分は話し手による指示対象の知覚を含意するものであることが分かる。

まず、「存在文」と同じように解釈されるものとして

は、「出る」「並ぶ」「かかる」がある。以下を参照されたい。

(12) 【出る】 紙芝居の最後にはクイズ**が**出る。(『東』)
(13) 【並ぶ】 ある時、下宿の前に改造バイク**が**並んでいた。 (『東』)
(14) 【かかる】右側のホールに、「①申込」というアクリル板**が**かかっている。 (『椿』)

(12)の「出る」は、解釈上、「紙芝居の最後にはクイズがある」と置き換え可能なことから広義の「存在」を示すと考えられる。同様のことは、(13)の「並ぶ」、(14)の「かかる」にも当てはまり、それぞれ「改造バイクがあった」「アクリル板があった」という存在文に置き換えることができる。

一方、「存在文」における「が」の出現が話し手による対象の知覚に結びつくという点に注目するならば、自発的知覚を明示する知覚動詞文では当然「が」が出現すると予想されるが、実際、本研究の観察によれば、「見える/聞こえる」では、まず「が」が出現することが確認された。この自発的知覚による「が」の出現は、文字通り知覚を表す動詞のみならず、次の「流れる」のように、比喩的に知覚を表す動詞においても頻繁に起こる。

(15) 【流れる】
一息ついて手と顔だけを洗いに行き、それからまた戻って、お菓子をつまんだ。頭の中をメキシコ組曲が流れている。 (『クローズ』)

ここまで述べてきた話し手による対象の知覚と「が」の出現の関係はさらに広げていくことができる。以下の例を参照されたい。

(16) 【来る】 あっという間に私の順番**が**来た。 (『クローズ』)
(17) 【起こる】 それを見守っていた周りから、どっと笑い**が**起こった。 (『クローズ』)
(18) 【死亡する】 同行していたカメラマンの川副浩明さん(26)＝京都府木津川市＝**が**CO中毒で死亡した。 (毎日2009/06/04)

上の表4で出現頻度がもっとも高かった「来る」は、91%という高い頻度で「が」と共起しているが、「来る」というのが主語が示す指示対象が話し手の居場所に出現することを示す動詞であることを考えるならば、それも不思議ではない。「来る」は「存在文」と同様に、話し手による指示対象の知覚を必然的に含意するものだからである。同様のことは、「起こる」についても言えるだろう。この動詞が示す事態の生起は話し手が新たに認識することである。したがって、「が」が出現すると解釈される。これらの動詞と「が」との共起は、まさに、野田(1996)の「出現表現は「が」と共起しやすい」という指摘と合致するものである。一方、「死亡する」は、それまで存在していた人の「消滅」を意味する。つまり、「出現」とは逆の意味で、話し手の知覚に認識されるものである。それゆえ、「死亡する」「死ぬ」など「消滅」を意味する動詞は通常「が」と共起すると考えられる。

次に、「は」と共起することの多い動詞の意味特徴について見てみる。表4によれば、「は」と共起することの多い動詞に共通する特徴は、その主語が「人」であることである。また、「が」と共起しやすい動詞とは逆に、話し手は当該動詞の主語が示す指示対象の存在を前提としていることも分かる。以下を参照されたい。

【見る】と【見える】
(19) 吉田**は**、まるでそれがかなえられる可能性のある望みででもあるように、期待を込めた顔で耕二をみている。 (『クローズ』)
(20) ネオンだらけの街からでも、星**が**みえる。 (『クローズ』)

【聞く】と【聞こえる】
(21) 吉田**は**こわばった青白い顔で、電話の相手の言葉をきいている。 (『クローズ』)
(22) 斜利を踏む足音**が**きこえている。 (『椿』)

上記の例から分かるように、同じ知覚動詞でも、「他動詞」と「自動詞」では選択する助詞が異なる。「見る」「聞く」のような「他動詞」の場合は、「人」が主語となり、「は」が出現するのが普通である。「人」を示す主語は、意志性を持ち対象に働きかけることが可能である。その結果、主語が「人」の場合は「他動詞」と共起しやすくなる。一方、自発的知覚動詞の場合、主語は「モノ」であることが一般的である。そして、無生の「モノ」は意志性を持たず対象に働きかけることができないことから、動詞は「自動詞」になる傾向がある。野田(1996：128)は、比較的に「が」が出現しやすい述語として、「できごとを表す自動詞や、他動詞の受動形」があるとし、逆に、比較的に「は」が出現しやすい述語として、「意志的な動作を表す他動詞」があるという指摘しているが、本研究の観察結果はこの点を確認したことになる。

「は」が出現しやすい動詞としては、表4にはあがっ

ていないが、他に以下の「発表する」のように、人間の言語活動や「考える」のような人間の認識活動を表す動詞がある。

(23)【発表する】

民主党の菅代表代行は、10日発売の中央公論7月号で、民主党による政権運営構想の私案を発表する。 (讀賣2009/06/04)

(24)【考える】

小さな手の上で、それは何だか子供じみた美しさを放っている、と、透は考える。 (『東タ』)

特に、人間の認識活動を表す動詞が「は」と結びつきやすいというのは、話し手の知覚という観点から考えると興味深い。モノの「出現」「消滅」に比べ、人の認識活動は話し手の知覚に直接訴えることは難しい。それが認識活動を示す動詞における「が」の出現を抑え、「は」の出現を引き起こしているのかもしれない。

最後に、表4の「続ける」のように、「が」「は」の両方と同じくらいに共起することができる動詞における「が」「は」の出現については、先行研究が指摘したような文脈情報、すなわち新・旧情報や、後続するアスペクト形式の機能などが影響すると考えられる。

5. 結論

本研究では、主文末動詞の意味特徴と「が」「は」の出現の関係を見てきた。その結果は以下のようにまとめられる。

本研究では、動詞の意味特徴と「が」「は」の出現状況の関係を観察するにあたり、事態の時間構造に基づく工藤(1995)の分類を用いたが、その分類では「が」「は」の出現の実態をうまく説明することができなかった。そこで、本研究は工藤(1995)の分類とは異なる観点から、特に、「が」と共起した文末動詞の共通項を検討した。その結果、「が」「は」の出現と文末動詞の意味特徴には、次に示すような相関関係があることが分かった。

まず、「が」と共起する動詞に関しては、何らかの意味で「が」によって示された指示対象の「存在」「出現」「消滅」等を表すものが多い。換言すれば、「が」は話し手の知覚、つまり、その視覚・聴覚等に直接に訴え、当該対象の存在の有無、当該事態の生起の有無を話し手が確認したことを示すような動詞と共起する傾向がある。野田(1996)は、主題をもたない文、つまり「が」が出現する文の述語に関して、「その場で知覚したできごとをそのまま表す述語」であると述べている。その意味において、本研究で得た結論は野田(1996)の主張を裏付けたものと言える。

一方、「は」が出現する際の動詞は、「は」によって示された指示対象の存在を前提としながら、その対象のあり様を示す他動詞が多い。そのため、「が」の場合と比べると、「は」と共起した動詞に特に共通する意味特徴はないように思われる。また、「は」と共起する動詞に他動詞が多いというのは、「は」が「人」を示す主語と出現することが多いということと関係する。ちょうど無生の「モノ」が自動詞を述語とする傾向があるのとは逆に、有生の「人」は意志性を持つことから、対象に働きかけることが可能であり、その結果、述語として他動詞を取ることが多くなるのである。

【注】

*本研究は2010年に提出した修士論文「動詞述語文における「が」と「は」の基礎的研究—主格を表す「が」「は」の出現状況をめぐって—」の第3章、第4章を基にしたものである。

[1] Cf. 益岡(2000), pp.39-53.

[2] ここで言う「有題文」は通常「は」が使用されるものであり、一方、「無題文」は通常「が」が使用されるものである。

[3] Cf. 砂川(2008), pp.115-116.
ここで言う「有題文」は通常「は」が使用されるものであり、一方、「無題文」は通常「が」が使用されるものである。

[4] 小説:リリー・フランキー『東京タワーオカンとボクと、時々、オトン』扶桑社2005、江国香織『東京タワー』新潮社2006、浅田次郎『椿山課長の七日間』朝日新聞社2005、雫井脩介『クローズド・ノート』角川書店2008。
新聞:朝日新聞 2009年6月3、4日付け日刊の第1～4、7、8、25、26面、読売新聞2009年6月1、3、4、5、7日付け日刊の第1～4、7～9、13、15、17、27、30、31、33～35面、毎日新聞 2009年6月4日付けの日刊の第1、2、3、5、7面、西日本新聞 2009年6月4、22日付けの日刊の第1～7、20、21、28面。

[5] 主語が話し手を指す1人称である全116例中、「が」と共起した例は一つもなく、そのすべてが「は」と共に出現していた。

[6] 工藤(1995)の分類ではすべて平仮名書きであるが、「その他」ではデータそのままの文字で表示した。それに、各動詞の右の数字は当該の助詞と共起した回数を示している。

[7] (A1、A2、A3)は外的運動動詞のAタイプ動詞の下

位分類である。

[8] この表に各グループ動詞の上位10位まで多い順に並べたが、10例を満たさない場合は、出現されたすべての動詞を載せている。

[9] 工藤（1995）の分類では、「へる」という「二側面動詞」と別に、「はらがへる」を一つの「感覚動詞」として分類している。

[10] 工藤（1995）の動詞はすべての動詞を扱っているわけではないため、それ以外の動詞も出現した。これらの動詞は表１の最後「その他」として頻出度の多い順に示しておいた。

[11] 括弧内の右は「が」「は」を合わせて出現した例の数で、左は「が」だけが出現した例である。また、「来る」は、本動詞と複合動詞の両方を含む。

[12] 「起こる」は本動詞と複合動詞の両方を含む。

[13] 今回は、紙幅の関係上、専ら「が」「は」の出現状況と文末動詞の意味特徴の関係しか扱えなかった。しかし、当該動詞のアスペクト形式と「が」「は」の出現状況の間に何らかの関係があるのは弘瀬（2010）で明らかになっている。この点については別稿で扱う予定である。

[14] 「ある」「いる」以外にも、「存在」を表す「存在している」も含む。

[15] 「なくなる」や「死去する」のような「死ぬ」という意味を表すものを含む。

[16] 「開港する」、「開店する」のような「開始」を表す動詞を含む。

[17] 「行く」は、本動詞と複合動詞の両方を含む。

[18] 「事物が上方に運動を起こしてはっきりと姿を現す」（広辞苑）の意味の「たつ」であり、「一年がたつ」のような時間が過ぎるという意味のものは含まない。

[19] 「訊く」「聴く」を含む人間の言語活動を表すもの。

参考文献

浅山友貴（2004）『現代日本語における「は」と「が」の意味と機能』第一書房

尾上圭介（2001）『文法と意味Ⅰ』くろしお出版

-----（2004）「主語と述語をめぐる文法」北原保雄（監修）尾上圭介（編）『朝倉日本語講座⑥文法Ⅱ』pp.1-57, 朝倉書店

上林洋二（1988）「措定文と指定文―ハとガの一面―」『文藝言語研究　言語編』14　pp. 57-74.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房

黒崎佐仁子「無助詞の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2,pp.77-93, 早稲田大学

杉浦滋子（2000）「「は」「が」の機能と述部の意味的性質」『日本語 意味と文法の風景―国広哲弥教授古稀記念論文集』pp.47-62, ひつじ書房

杉本和之（1984）「「は」と「が」―話し手（私）、聞き手（あなた）の場合」『日本語教育』52号, pp.121-132, 日本語教育学会

砂川有里子（2008）「事象叙述の有題文と無題文―自然会話を用いたケーススタディー―」益岡隆志（編）『叙述類型論』pp.115-137, くろしお出版

野田尚史（1984）「有題文と無題文―新聞記事の冒頭文を例として―」『国語学』136, pp.65-75 国語学会

-----（1996）『「は」と「が」』くろしお出版

弘瀬葉子（2010）「動詞述語文における「が」と「は」の基礎的研究―主格を表す「が」「は」の出現状況をめぐって―」未刊行修士論文

益岡隆志（1987）『命題の文法―日本語文法序説―』くろしお出版

-----（2000）「属性叙述と事象叙述」『日本語文法の諸相』pp.3-18, くろしお出版

-----（2004）「日本語の主題―叙述の類型の観点から―」益岡隆志（編）『主題の対照』pp.3-17, くろしお出版

三尾砂（1948）『国語法文章論』三省堂

三上章（1953）『現代語法序説―シンタクスの試み―』刀江書院（復刊　くろしお出版1972）

-----（1963）『日本語の構文』くろしお出版

吉本啓（1982）「「は」と「が」－それぞれの機能するレベルの違いに注目して－」『言語研究』81号, pp.1-17, 日本言語学会

Kusumoto,Tetsuya（1998）“Zero Particle and its Thematic Function.”Tokyo Gaikokugo Daigaku Ryugakusei Nihongo Kyoiku Senta Ronshu24, pp.23-31.

On the Conditions of the Occurences of "Ga" and "Wa" in the Verbal Predicates

– With a Special Attention to their Relations with the Semantic Features of the Main Verbs

Yoko HIROSE

The aim of this paper is to elucidate the functional differences between the subject particles "Ga" and "Wa" which appear in the verbal predicates, especially from the point of view of the semantic features of the main verbs in the predicates where "Ga" or "Wa" appears.

The results of this research are indicated below.

i) The features of the main verbs in the verbal predicates where "Ga" appears are as follows:

- Most of the verbs in question are intransitive, whose subject is inanimate.
- Many of the verbs in question signify, in some sense, the "appearance," "disappearance" and "existence" of the referents expressed by the subjects. This suggests that the subject particle "Ga" tends to occur with verbs that denote the perception of the speaker. In other words, verbs which appear with the subject particle "Ga" denote, in some sense, that the speaker affirms that she has perceived the existence (or non existence) of the object in question.

ii) The features of the main verbs in the verbal predicates where "Wa" appears are as follows:

- Many of the verbs in question are transitive verbs.
- It is difficult to find semantic features common to the main verbs which appear in the verbal predicates where "Wa" appears.
- Most of the referents expressed by the subjects are contextually given.
- In most of the cases, the predicate in question refers to the property or temporal state of the referent expressed by the subject.